

Title	知的障がい者の社会的スキルを促進するための性教育プログラムとその効果に関する研究
Author(s)	林, 真由美
Citation	大阪大学, 2011, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/58214
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉 大阪大学の博士論文について 〈/a〉 をご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

氏名	はやし まゆみ 林 真由美
博士の専攻分野の名称	博士（保健学）
学位記番号	第 24457号
学位授与年月日	平成23年3月25日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当 医学系研究科保健学専攻
学位論文名	知的障がい者の社会的スキルを促進するための性教育プログラムとその効果に関する研究
論文審査委員	(主査) 教授 大橋 一友 (副査) 教授 永井利三郎 教授 清水 安子

論文内容の要旨

知的障がい者の性教育は学校教育だけでなく、地域においても継続した実施が望ましい。本研究は地域で生活する知的障がい者を対象に8回の性教育プログラムを作成し、その効果を検討した。

プログラムの作成および実施あたっては、[調査研究1] 地域で生活する知的障がい者に対して性知識と性ニーズ（性に関して「知りたい」という知識欲）の調査を実施し、彼らの性知識は低く、偏りのあることを明らかにした。また、その低い性知識に対して高い性ニーズをもっていることから、地域で性教育を実施していくことが必要と考えた。また、性教育を進めるにあたり、知的障がい者の最も身近な生活の援助者でもある家族の役割は大きく、家族との連携や調整が必要と考えた。そこで、[調査研究2] 知的障がいのある子どもをもつ保護者の調査を実施した結果、約60%の保護者が地域での教育支援を希望していたことが明らかとなった。また、障がい程度により、重度の子どもをもつ保護者であれば公私場におけるマナーやエチケットなど、中軽度の子どもをもつ保護者は性被害・加害の予防や対策、異性との関わり方などの内容を希望していた。両者に共通して性被害・加害に巻き込まれないような社会的スキルを望んでいたことから、自己主張訓練や他者の気持ちの理解などの演習内容を含めた性教育プログラムを地域で展開していくこととした。

[介入研究1] 予備的調査として、2施設の知的障がい者施設の対象者12名に対して、4回の性の学習会を実施した。その結果、内臓器の部位や名称についての知識を問う内容では、終了1か月後に記憶低下を認める対象者が多かった。内臓器の部位や名称の理解は困難であることや、説明する臓器は対象者の理解のレベルに応じて限定することが必要であった。また、複数の媒体を使用しても体内の臓器であることを理解できる対象者が少ないことから、人体をイメージできるようなリアルな媒体が必要であると考えた。一方、社会的スキルを含むロールプレイングやゲームなど、演習に関する内容では1か月後の記憶維持を認めた。そこで、社会的スキル向上にむけて演習内容の充実を図るとともに、実施回数を増やして継続的に施設内での取り組みにつなげていくことが重要であると考えた。

そこで、本研究の性教育プログラムは、実践力を養うために予備調査[介入研究1]には含めていなかった

た施設外で行う活動や健常者のボランティアとの関わりを含めるなどの演習の充実を図った。また、人体の仕組みを理解するために実物模型のある「人体の不思議展」の展示会に行く内容を含めた。対象者は大阪府の通勤寮を利用する知的障がい者17名として、2007年10月～12月に8回の性教育プログラムを実施した。性教育プログラムの評価は、社会的スキルの程度を測定する尺度として、KiSS-18(Kikuchi's Scale of Social Skills)の質問紙を実施前と終了1ヶ月後に実施した。対照群として大阪府の別の通勤寮を利用する知的障がい者17名に、2ヶ月の間隔をあけて同質問紙による2回の調査を実施した。

介入群17名の社会的スキル尺度の平均得点は実施前55.4±12.9に対し、終了後には61.8±13.2と有意な差がみられた（ウィルコクサン符号付順位検定, $p<0.05$ ）。一方、対照群では1回目と2回目の平均値に有意な差はみられなかった。性教育プログラムの実施により社会的スキル尺度の得点は上昇し、体験型の演習やボランティアの参加などの効果が示された。

論文審査の結果の要旨

知的障がい者の性教育は学校教育だけでなく、地域においても継続した実施が望ましい。本研究は地域で生活する知的障がい者を対象に8回の性教育プログラムを作成し、その効果を検討した。

プログラムの作成および実施あたっては、地域で生活する知的障がい者に対して性知識と性ニーズ（性に関して「知りたい」という知識欲）の調査を実施し、彼らの性知識は低く、偏りのあることを明らかにした。また、その低い性知識に対して高い性ニーズをもっていることから、地域で性教育を実施していくことが必要と考えた。また、性教育を進めるにあたり、知的障がい者の最も身近な生活の援助者でもある家族の役割は大きく、家族との連携や調整が必要と考えた。そこで、知的障がいのある子どもをもつ保護者の調査を実施し、約60%の保護者が地域での教育支援を希望していたことが明らかとなった。また、障がい程度により、重度の子どもをもつ保護者であれば公私場におけるマナーやエチケットなど内容を希望し、中軽度の子どもをもつ保護者は性被害・加害の予防や対策、異性との関わり方などを望んでいた。両者に共通して性被害・加害に巻き込まれないような社会的スキルを望んでいたことから、自己主張訓練や他者の気持ちの理解を社会的スキルを含めた性教育プログラムを地域で展開していくこととした。

予備的調査として、2施設の知的障がい者施設の対象者12名に対して、4回の性の学習会を実施した。その結果、内臓器の部位や名称についての情報・知識では、終了1か月後に記憶低下を認める対象者が多かった。内臓器の部位や名称の理解は困難であることや、説明する臓器は対象者の理解のレベルに応じて限定することが必要であった。また、複数の媒体を使用しても体内の臓器であることを理解できる対象者が少ないことから、人体をイメージできるようなリアルな媒体が必要であると考えた。一方、社会的スキルを含むロールプレイングやゲームなど、演習に関する内容では1か月後の記憶維持を認めた。そこで、社会的スキル向上にむけて演習内容の充実を図るとともに、実施回数を増やして継続的に施設内での取り組みにつなげていくことが重要であると考えた。

本研究の性教育プログラムは、実践力を養うために予備調査には含めていなかった施設外で行う活動や健常者のボランティアとの関わりを含めるなどの演習の充実を図った。また、人体の仕組みを理解するために実物模型のある「人体の不思議展」の展示会に行く内容を含めた。対象者は大阪府の通勤寮を利用する知的障がい者17名として、2007年10月～12月に8回の性教育プログラムを実施した。性教育プログラムの評価は、社会的スキルの程度を測定する尺度として、KiSS-18 (Kikuchi's Scale of Social Skills) の質問紙を実施前

と終了1ヶ月後に実施した。対照群として大阪府の別の通勤寮を利用する知的障がい者17名に、2ヶ月の間隔をあけて同質問紙による2回の調査を実施した。介入群17名の社会的スキル尺度の平均得点は実施前 55.4 ± 12.9 に対し、終了後には 61.8 ± 13.2 と有意な上昇がみられた（ウィルコクソン符号付順位検定, $p < 0.05$ ）。一方、対照群では1回目と2回目の平均値に有意な差はみられなかった。性教育プログラムの実施により社会的スキル尺度の得点は上昇し、体験型の演習やボランティアの参加などの効果が示された。

以上の研究は知的障がい者の性教育について新しい知見を与えるものであり、博士（保健学）の学位に値するものと考えられる。